

竜王の館

作・雪村月路 / 絵・池田優

後編



竜王の息子の求婚をつらそうに退けたその翌日、フィリシアは、おそらく前の晩に寝付くのが遅かったのだろう、珍しく朝ゆっくりと起きて来たが、それでも、ささやかに食事をとった後は、いつもと変わらない穏やかな様子で、ナミを相手にとりとめのないおしゃべりをしていた。

「私、もっと普通のお洋服が欲しいわ」

と、フィリシアが言っていた。

「もちろん、毎日ご辞退しているドレスが嫌なわけではなくて、あなたの縫ってくれたこのドレスも、とても素敵で気に入っているのだけれど、でも、こんなに華やかな、舞踏会に着て行くようなドレスばかりではなくて、もっと普段着のようなお洋服を作ってもらえないかしら」

「まあ、姫さま」

ナミは縫物の手を休めて顔を上げ、驚いたようにそう言った。この姫君が何かを欲しいと言ったのは初めてのことだったし、普段着が欲しいという言葉がどういう意味かということくらいは、この侍女にもわかった。

「いけない？」

「いいえ・・・いいえ」

ナミは思わず顔をほころばせた。

「すぐにお作りいたします。明日にはもう、それは着心地のいい、動きやすい服を着ていらっしゃいますわ」

「ありがとう」

フィリシアはにっこりと笑った。

「私もいつまでもお客様ではられないものね」

和やかな空気が二人を包んだ・・・と、そのとき。

廊下が不意に騒がしくなった。それほど近くではなかったが、静かなこの離れでは、向こうで何か起こっているらしいことが、こちらにもよく伝わって来た。

「何かしら」

フィリシアは不審げにナミの顔を見た。ナミは緊張の色を浮かべて、しばらく耳を澄ませていたが、

「わかりません。姫さまはここにおいでくださいまし、わたくしが見て参ります」

立ちあがって出て行った。騒ぎはだんだん近づいて来るようだった。

「偉大なる竜王様」が、ご子息の過ちに気付かれたのかしら——と、フィリシアは何とはなしにそう思った。人間の娘などにうつつを抜かして、と。もしそうなら、しゃんとして、あの方の恥にならないようにしなければ。そうして、地上に帰してもらえればいいのだけれど・・・そうはいかないのでしょうかね。一体、「偉大なる竜王様」というのは、どんな方なのかしら。

考えているうちに、騒ぎはどんどん近付いて来た。侍女たちの声が聞きとれる——そう、たしかに「竜王様」と聞きとれる。「でも若様が」とも。つまり、この水底の主たる竜王が、息子の管轄である離れに、断りなしに入ってきているのだ。

フィリシアはだんだん不安になって来た。気を励まして背筋を伸ばすと、ドアがバタンと開いて、ナミが飛びこんで来る。真っ青な顔に絶望の表情を浮かべて、この侍女は、敬愛する姫君のために、ただそれだけのために、健気にもかすれた声を振り絞って客の来訪を告げた。

「姫さま・・・ご友人が！」

それは、ほとんど悲鳴だった。え？と、フィリシアが問い返そうとしたときには、しかし、すでに、開いたままの戸口に、訪れて来た人が姿を見せていた。

——夢にまで見た人が、そこに立っていた。

「フィリシア。・・・よかった」

どこにいても彼を際立たせずにおかない、涼やかに冴え返った清冽な空気。水底のたゆたいを吹き払う、目の覚めるように鮮やかな存在感。——白と金色を基調とした、ほぼ正装に近い服装で、フルートは当たり前のように凜然とそこに立ち、厳しかった表情にほっと安堵の色を見せて、親しい姫に手を差し伸べていた。

「迎えに来たよ」

「・・・フルート！」

フィリシアはとうの昔に椅子から立ちあがって、自分の目が信じられないという顔でその場に立ちすくんでいたのだが、呪縛が解けたように足を踏み出し、何歩か歩いて、つまり倒れそうになった。

「おっと」

フルートがあわてて前に出て受け止める。フィリシアは緊張の糸が切れて、そのまま彼に抱きついて泣きだしてしまった。

「フルート・・・もう二度と会えないかと思っていたの！」

金髪の王子は抱きつかれて少し困ったふうだったが、悪い気はしなかったし、もちろん突き放すつもりもなかったので、ぎこちない手つきでそっとフィリシアの髪をなでた。そして、しかし、そうしながらも、後から入って来たもう一人を振り返って助けを求めずにはいられなかった。

妖精を統べる<光り姫>は、笑いながらフィリシアの髪を引っ張って呼びかけた。

「ねえ。私は？」

フィリシアは二度びっくりして、フルートから離れ、この友達に向き直った。

「ミルガレーテ！ まあ・・・何てきれいなもの！」

<光り姫>は、クリーム色のふわふわしたドレスの上に、光り輝く金の髪を波打たせて、世にも美しい微笑みを浮かべていた。

「あなただって」

ミルガレーテは言って、フィリシアの手を取り、不思議な金色の目で、じっとフィリシアの目をのぞきこんだ。

「無事で良かった！ ごめんなさいね、遅くなってしまって」

そうして二人の姫君は、やっぱり感極まって、抱き合っただけでしばらく離れなかったのだった。

「おお・・・これはこれは」

ややあって、遅れて入って来たのは、これは今度こそ、偉大なる竜王その人とその妃だった。そしてその後ろに――たぶん今しがた合流したのだろう、竜王の息子が、打ちひしがれた様子で立っている。彼は目を上げて、ミルガレーテから離れた青い髪の姫君を食い入るように見つめた。フィリシアはその視線を避けて目を伏せた。

竜王が言葉を続けていた。

「では、倅の奴め、本当に・・・。いや、ご友人には実に失礼なことをした、光り姫。お許し願いたい」

ミルガレーテに軽く頭を下げる。白い髪と、長い白い髭をした、おそろしげな顔の王であったが、見かけよりはずっと話のわかる賢い王であることは、その言葉の端々から察することができた。

ミルガレーテは上品に挨拶を返し、

「いいえ。こちらこそ、いろいろと勝手ばかり申しあげて、申し訳ありませんでした。友人も良い待遇を受けておりましたようで、改めて竜王様ご一族のお心遣いに感謝いたします」

「なんの、勝手にひっさらって来ておいて、待遇も何もあったものではない。誠にすまなかった」

竜王はそう言って、フィリシアのほうに目を移した。フィリシアは、努めて心を落ち着かせようとしながら、うつむき加減にそこに立っていたのだが、気が付いて目を上げ、静かに会釈を返した。竜王はそれを鋭い目で眺め、

「ほう。なるほど、これはお美しい方だ。このたびは倅が失礼をしたが、許してやってくださいませんか」

フィリシアは初めて竜王と話すのに緊張したが、何とか微笑らしきものを浮かべて、優雅にお辞儀した。

「ご息様には、何から何まで、すっかりお世話になりました。今こうして、元いた場所に帰していただけます以上、何をお恨みすることがございましょうか」

「さようか。そう言っただけだとありがたい――おお、これ、どこへ行くのだ」

最後の言葉は、くるりと背を向けて立ち去った息子に向けられたものだった。フィリシアの胸がずきりと痛み、彼女は切ない思いでうつむいた。あの方には、もったきちんとお礼がしたかったし、お別れも言いたかったのに、と彼女は思った。

「いや、失礼をお許し願いたい。あやつには後でよく言っておきますゆえ」

竜王は改めてフィリシアに言って、なおもしばらく彼女を見つめていたが、やがてついと視線をそらし、ミルガレーテに向かって、

「それでは、みなさん、すぐにお帰りになりますかな」

「ええ。また船をひとつ、用意していただけますか」

「お待ちになってくださるなら、もてなしもさせるし、風の船も用意させるが」

「来る時も水の船で来ました。水の船で結構です、わたくしが同乗します」

「さようか。では」

一行はぞろぞろと部屋を出たが、するとそれへ、
「お待ちくださいまし！」

悲鳴のような声が追いつがって来た。

「後生でございます・・・姫さま！」

それは、いつのまにか姿を消していたナミだった。ナミは追いかけて来ると、振り返って立ち止まった一行の前にひれ伏して、

「ご無礼をお許しくださいます。けれども、わたくし・・・わたくしは」

「少しお時間をいただけますか」

フィリシアはたまらなくなつて竜王を振り返った。竜王は重々しくうなずいた。ミルガレーテが歌うような声で、

「それなら、私達は向こうのお部屋に行っているわ。お話が終わったら・・・」

「はい、わたくしがお連れいたします」

ミルガレーテに答えて、ナミが必死の形相で言った。

「必ずお連れいたします、光の姫さま」

ミルガレーテはにこりと笑った。フィリシアはナミのそばに寄って、やさしく彼女を助け起こした。

じゃあ、とミルガレーテはフィリシアに微笑みかけ、他の皆を促して向こうへ去って行った。

「さあ、ナミ」

あとに二人残されて、フィリシアはナミを立たせると、いつものように穏やかに微笑んでその手を取った。ナミは顔を上げて、

「姫さま・・・」

言ったまま絶句したが、やがて気を取り直し、そっと手を引くと涙をぬぐった。

「姫さま。わたくし、姫さまに差し上げたいものがあるのです。どうぞ、こちらへ」

ナミはそう言って、先に立って歩き出した。

曲がりくねる廊下に沿って、白い壁が、濡れたように光りながらでこぼこと続いていた。廊下も壁も、おかしい具合にゆがみ、傾いていたが、しかし、それらはそれゆえにいつそう、美しさと威厳を増しているように見えた。

そして、いまさらながらフィリシアが気づいてみると、彼女は今まで、部屋から一步も出たことはなかったのだ。彼女はともかくも囚われの身で、いかに丁重にもてなされていたにしても、実質的には軟禁状態に置かれていたのだ。部屋から出ることは固く禁じられていて、それが気にならなかったのは、ひとえに、たとえ部屋の外に出られたとしても地上につながる道は無いと知っていたから、だった。

フィリシアがそういったことに改めて思い至り、感慨にふけりながらナミの後について歩いて行くと、ナミはそれほど長くは歩かずに、ひとつの部屋の前で立ち止まり、鍵を出して扉を開けた。中に入って、

「どうぞ、姫さま」

と、招き入れる。

フィリシアが中に入ると、そこは衣裳部屋だった。見渡す限り、ぎっしりと服がしまいこまれ、狭い通路がかりうじて区画を分けている。その手前側の一角には、明らかに真新しいとわかるドレスの一群があった――フィリシアのために作られた服に違いなかった。

そして・・・服でいっぱいその部屋の、わずかに空いた空間に、誰あろう竜王の息子が、所在無げに立って、きまり悪そうな様子でフィリシアを見ていたのだ。

「まあ」

フィリシアは思わずナミを振り返った。

「お許しくさいます」

ナミはうなだれたが、竜王の息子が口をはさんで、

「姫。それを責めないでやってくれないか。私のためにしてくれたことなのだ」

「責めるなんて、そんな・・・とんでもない・・・でも・・・」

フィリシアはうろたえて口ごもった。竜王の息子はかすかに笑った。

「私と話をするのはお嫌ですか、姫？」

「まあ、いいえ！」

「では、少しくらい付き合ってくれても良いはずだ。あなたはもう行ってしまふのだから」

竜王の息子はつぶやくように言った。フィリシアは何と答えればいいのかわからなかった。

竜王の息子は、いくぶん自嘲的に続けた。

「しかし、姫。あなたが光り姫と親しかつたとは知らなかった。私も運が悪いな」

「ミルガレーテのことですね。あなた方とはどういうお知り合いですの」

「おや、姫は知らないのか」

「あの人は妖精を統べるのだ、としか」

「妖精を・・・そうだな、それだけではなくて」

竜王の息子は言いかけたが、ふと気づいて、

「だが、それは光り姫に聞いたほうが良いだろう。今は時間もないし・・・光り姫自身が

話していないのなら、私などがどこまで話して良いものかも、私にはわかりかねる。ともかく、あなたと光り姫はたいそう親しいようだから。光り姫は、自分が交渉すると角が立つと見てか、形式上、あの・・・人間、に、口添えするという形で見えたようだが。そう、あの人間は・・・その、姫。あなたとは」

竜王の息子は口ごもった。

「はい？」

「その・・・いや、何でもない」

竜王の息子は迷ったあげくに、その質問を飲み込んだ。そして、代わりに、「姫。それで、ナミが姫をここに連れて来たのは、姫と私を合わせるためだけではなくて、そもそもナミが言いだしたことなのだが、姫にこの」

軽く手を振ってドレスの一群を示し、

「服を持って帰ってもらおうと思ったのだ」

「え・・・ええっ？」

フィリシアは思いもかけないことを聞いてびっくりした。竜王の息子は気にかけず、「手を出して」

フィリシアが不安げに手を出すと、その手に小さな丸い物を乗せた。ごくありふれた、しかし、こんな水底にはいささか不似合いな気もする――

「――くるみ？」

「そうだ。叩いてごらん、三度」

「叩くって・・・」

「たとえばそこの壁で」

フィリシアはおそるおそるくるみを壁に打ちつけ、

「もっと強く」

言われて、もう一度やり直した。すると・・・くるみはぱっくり口を開け、しゅうっと音を立てて中から紫色の煙が立ちのぼり、煙は空中でもやもやと凝り固まって・・・最後にぱさっと音を立てて、フィリシアの足元に、確かに一度は見たことのある、薄紫のレースのドレスが落ちた。

竜王の息子は身をかがめてドレスを拾い上げた。

「繰り返せば何着でも出てくる。この部屋とつながっているのだ。ナミが取り仕切る」

「でも、私」

「用が済んだら、服の上から、また三回叩く」

ドレスを突き付けられて、フィリシアはやむを得ず言われたとおりにした。さっきと逆の現象が起こり、ドレスは紫色の煙となって、くるみの中に吸い込まれてしまった。

「これを姫にあげよう」

「そんな、私、いただけません」

「なぜだ？」

「だって、私・・・」

フィリシアは言いよどんだが、思い切って言った。

「私は、あなたを振り切って帰ろうとしているのです。それなのに、こんなことまで・・・。一度も袖を通していないのですし、私などよりドレスの似合う方はたくさんいらっしゃるでしょうに」

「ナミに聞いてごらん」

フィリシアはナミを振り返った。ナミは決然とした面持ちで、
「わたくしも、わたくしの同僚たちも、姫さまに着ていただくために縫ったのでごさいませ。姫さまがお召しになってくださらないなら、どなたに差し上げるつもりもごさいません」

「でも、私にその権利はないわ！」

「姫」

呼ばれて、フィリシアは竜王の息子に向き直った。竜王の息子は真剣な様子をしていました。

「私は姫を忘れないだろう。何十年も、何百年も。だが、姫は・・・姫は、私を覚えていてくれるつもりはあるのだろうか？——もし」

フィリシアの答えも聞かずに、おおいかぶせるように続けて、
「もし姫が、少しでも私のことを覚えていてもかまわないと思ってくれるなら・・・受け取ってくれないか」

フィリシアは竜王の息子の青い青い瞳を見つめた。それから、視線を落として手の上の魔法のくるみを見た。しばらく沈黙し、そうして、やがて言った。

「首にかけておけるように、紐を付けていただけますか」

「かしこまりました」

ナミがすぐに進み出て、フィリシアからくるみを取り上げた。服のどこかから針を取り出し、銀の紐を通してくるみに当てると、針はすうっとくるみを突き抜ける。はさみで切って、紐を結び、細い指できゅっとしごとくと、結び目はわからなくなってしまった。

「どうぞ、姫さま」

フィリシアは受け取って、首にかけ、くるみをドレスの胸元に落とし込んだ。

「ありがとう、姫」

竜王の息子が静かに言うと、フィリシアは真面目な顔でその顔を見上げた。

「わたくしはあなたを忘れませんが」

彼女は表情を動かさずにそう言ったが、その、どうかすると冷ややかとさえ言えそうな声の中には、抑えられた豊かな感情と、紛れもない真実の響きがあった。

「でもあなたは・・・早く、わたくしをお忘れになってください」

それは、フィリシアの「答え」だった。竜王の息子は、それを受け止めた。

「・・・姫は、優しいのだな。それに賢い」

竜王の息子は穏やかに——内心では千々に思い乱れていたのだが自分でも不思議なほど穏やかに——言った。

「努力はするが・・・姫を忘れるのはずいぶんな難題だな」

フィリシアは黙って目を伏せた。竜王の息子はそっと手を上げて、その青い髪に触れた——そして、逃げないでくれている姫君の信頼を裏切らないように、すぐに手をひっこめた。

「では、お別れだ」

フィリシアは目を上げて、もう一度竜王の息子を見つめた。締め付けられた感情のたがが、今にも外れて泣きだすのではないかという顔をしていたが、それでもそうはならなかった。彼女は危ういバランスを保って表情を崩さないまま、優雅に深々と一礼し、

「——本当にお世話になりました」

かすれた声でそう言った。竜王の息子はぐっどこぶしを握った。

「・・・うむ。元気で」

「貴方様も」

二人とも、それ以上は何も言えなかった。フィリシアはナミのほうに手を差し伸べ、ナミは、これはもうぽろぽろと涙を流しながら、近くに寄ってその手を取った。フィリシアはもう一度だけ軽く頭を下げ、そして、もう視線を合わせることはせずに、竜王の息子が見守る中を、向きを変えて出て行ったのだった。

偉大なる竜王とその妃に挨拶を述べて別れた後、館を出て船着き場に向かう途中、フィリシアは振り返り、初めて、この大きな館とその離れの全貌を目にすることができた。足を止め、見上げるようにして建物の輪郭をなぞり、傍らのミルガレーテに、

「私がいいたのはあの辺りだったのね」

と、離れのほうを指差すと、ミルガレーテは、

「そうね」

と言って、しばらく一緒に眺めていてくれた。

やがてまた彼女達は船着き場の方へと足を向け・・・すると、向こうの棧橋では、先に行ったフルートも、まだそこに立ったまま、どうやら顔を上げて竜王の館を眺めている様子なのだった。雅やかな装いの、すらりとした体をわずかにそらせ、見事な金髪を水底の不思議な風に吹かせて、彼はじっと、何か館の上のほうを見つめていた。

「フルート？」

フィリシアは声をかけながら近づいて、自分も振り返ってその視線を追ってみたがおかしなものは見当たらず、フルートはその彫像のような姿勢を崩して、別に何の変わった様子もなくフィリシアに笑いかけた。

「もういいのか」

「ええ」

「では行こう」

棧橋の下で揺れている船は、元々がここは水底であってみれば、まるで風に揺れているようにしか見えなかった。深い青色に塗り上げられた、十人ばかりが乗れそうな船。

ミルガレーテが教えてくれたところによると、この＜水の船＞というのは、本来は、水底と地上とを、人間が呼吸できるようにつなぐことはできないそうだった。魔法の領域に近い彼女がいるのでこれが使えるのであり、そうでなければ人の行き来には＜風の船＞が使われるのだという。＜風の船＞はもっと明るい青に塗るの、と、光り姫は微笑んだ。

ミルガレーテが最後に乗ると、船は上に向かってゆらりと出発した。大きな荘厳な竜王の館は、みるみるうちに遠ざかり、やがて小さくなって見えなくなった。船の上では三人とも、ほとんど口をきかなかった。時折、魚が目の前を過ぎて行き、彼らが今どんなに不思議な体験をしているかということ思い出させた。

水の中はとても静かだった。そして、何もかも、もはやうつつのこととは思われなかったのだった——。

地上に着いたのは夕方だった。辺りには人ひとり見えなかった。船は、三人を降ろすと溶けるように水中に消えて行った。

「・・・気のせいかしら」

フィリシアは周りを見回して言った。

「なんだか・・・沼が大きくなったみたい」

「ああ。豪雨だったから」

フルートが答えた。表情を曇らせて、

「雨を降らせたのは竜王の息子だと聞いたが、乱暴な雨だった。川が氾濫して街外れの橋も渡れなくなっただし、作物も、根こそぎ取られて大変なことになっている」

「そうなの・・・」

フィリシアは驚きを浮かべてそう言った。竜王の息子が自分にかまけて他のことを顧みなかったと知るのには、胸の痛むことだった。

「彼はもっと周りのことも気にかけたほうがいいだろうとは思う」

フルートが、せいっぱい控えめな言い方で意見を述べた。自身がいずれ一国を預かる立場であるだけに、身につまされているのに違いなかった。

「そうね」

フィリシアは同意した。本当にその通りだと思ったのだった。

近くに馬車が呼んであった。三人はそれに乗って、街へと揺られて行った。馬車の中では、船にいた時よりはずっと話が弾んだ。話題になったのはもっぱら、フィリシアが不在の間に何があったのかということだった。

フルートの話によれば、フィリシアが沼の中にさらわれたことは、案外すぐにわかっていた。雨の中、村人がフィリシアの馬を連れて、街の宿屋まで教えに来てくれたのだ。フルートは知らせを聞いて驚いたが、まずは合流した友人たちと相談した。

問題はそこからだった。ゼラルドが言うには、竜王のように人知を超えた者たちは、おのおの固有の空間領域を持っており、そのような別世界に、招かれずして人間が入って行くことは不可能だということだった。彼は雨が降りだしてから三日目に、豪雨を見かねて部屋で何かの儀式をおこない、雨をやませてしまったのだが、その彼にすら、境界を越えることはできないのだと。頼みの綱は、フィリシアの親友である〈光り姫〉、人間界と妖精界のあわいに住まうミルガレーテだけだということになった。

次の問題は、ミルガレーテをどのように呼び出すかということだった。セレンは彼女を知らなかったし、フルートとゼラルドは数えるほどしかこの姫に会ったことがなく、ただ、彼女が古代レティカの宝剣に関係が深いということと、新月を過ぎてから満月までの間にしか現れないということを知っているだけだったのだ。

彼らはともかくも、欠けてゆく月が再びふくらみ始めるのを待った。そのうえで、フルートとゼラルドは、以前自分たちが剣を合わせたときのことを覚えていたので試してみたが、二人が敵対していないためだろう、〈光り姫〉を呼び出すことはできなかった。しかし、なにしろ手がかりは黄金の宝剣だけで、フルートは試みに剣で自分の手を傷つけ・・・そして今度こそどんぴしゃり、動転したミルガレーテを呼び出すのに成功した。

剣は持ち主の血に反応して異変を伝えたのだ。

「それで、セレンにももう紹介したんだ。呆然として見とれていたよ！」

フルートが笑いながら言う横で、ミルガレーテは頬をぽっと染めている。

「え？ だって、剣の持ち主にしか・・・」

「うん、それがね。前に話したことがあるだろう、セレンが抜けない剣を持っていることを。使っていた剣をこの前だめにしてしまったから、新しい剣を手に入れるまで身に付けていたら、あるとき抜けるようになったそうだ。やはり、ぼく達と同じ、レティカの宝剣だった」

「どうして今まで抜けなかったのかしら？」

「私にもわからないの」

と、ミルガレーテが応じた。

「あの剣は人を選ぶから、これまであの人が何か条件に合わなかったのかもしれないけれど。でも・・・よくわからないわ」

「単純に、その時が来た、ということなのだろう」

フルートは言いながら、馬車の窓からちらりと外を見やった。

「そろそろ着くよ。大きなところに泊まり替えているから、しばらくはゆっくりできると思う」

「ええ。ありがとう」

フィリシアは感謝をこめて言った。

「二人とも、今日は本当にありがとう」

「何を改まって」

フルートが笑った。馬車が止まって、御者がドアを開けに来てくれる。

「じゃあね、フィリシア」

そのドアが開く前に、ミルガレーテはささやいて、ふっと消えてしまった。もとより御者は、ミルガレーテについては馬車に乗るところも見てはいない。二人を降ろし、約束の代金を弾んでもらうと、御者は丁寧に礼を述べ、また御者台に座って、馬車を走らせて行ってしまった。

フルートとフィリシアは何となく目を見交わして、何となく微笑みあい、仲良く並んで建物の玄関に歩いて行った。

馬車の音を聞いたらしく、玄関口に、セレンが迎えに出てくれていた。フルートには軽くなずいただけだったが、フィリシアには優しい声をかけてくれる。

「やあ、お帰り。元気そうだね、よかった」

「心配をかけてごめんなさい」

「とんでもない。君さえ無事ならいいんだ」

にっこり微笑んで、

「そのドレス、とても似合っているね。フルートも、そう思わない？」

「え、ああ、うん」

フルートは曖昧な返事をした。セレンはちらりとフルートをにらんだが、

「部屋の案内は任せるよ、フルート」

「ああ。おいで、フィリシア。君の部屋は取っておいたから」

階段を上っていく二人を見送って、セレンは階下に残り、部屋と日にちの確認をするために帳場に足を向けた。

さて、フルートは、フィリシアを部屋に送り届けて、ドアの前で、なるほど良く似合っている彼女の豪華な服を見ながら、気にかかっていたことを尋ねずにはいられなかった。

「フィリシア。君をさらった竜王の息子は、ずいぶん君を大切にしていたんだね」

「・・・ええ」

フィリシアはためらいながら答えた。フルートは続けて、

「もしかして、君は求婚されて――？」

「・・・ええ」

「やはりね」

フルートは納得の行った顔をした。そして、フィリシアがいつのまにかうつむいてしまっていることには気づかずに、軽口でもたたくように、

「どうして承諾しなかったんだい」

・・・言ってしまうから後悔したが遅かった。はっとフルートを見上げたフィリシアの、青い瞳がみるみるうちに潤んで来たかと思うと、涙がぼろぼろとそのほおを伝い始めたのだ。

「フィリシア」

あわてて謝ろうとしたフルートをフィリシアが制した。顔を伏せ、

「あなたが悪いのではないわ。何でもないの」

「でも君」

「ごめんなさい・・・失礼させて。気分がすぐれないの」

もちろん、それを止めることなどできはしなかった。フィリシアは部屋に入ってしまう、フルートは自分の部屋に戻り――が、すぐに途方に暮れてしまった。以前、国境近くのごたごたで彼女を泣かせてしまった時は、彼自身が軽い怪我を負ったことで自然に紛れたけれど、今度は・・・。

それで、彼は仕方なく、相談しようとセレンの部屋を訪ねて行った。

セレンはもう部屋に戻っており、ドアを開けてフルートの顔を見るや、何か仕出かした

と察して、黙って中に入れてくれた。が、話を聞き終わると、
「まったく何ていうばかなことを・・・」

そう言ったまま、あきれかえってしばらくは二の句が継げない。フルートが不機嫌に、しかし反論のしようもなく黙っていると、そのうちやっと言葉を継いだが、
「本当に、どうしてそこまで鈍感になれるんだか」

「それは聞き飽きた」

フルートは憂鬱そうに言って、
「どうすればいいと思う？」

「どうって・・・謝りに行けよ。君が悪い」

「何を言えばいい？」

「少しは自分で考えるんだね」

セレンは言ったが、テーブルの上に伏せてあったグラスを一つ取り、フルートに飲みものを注いでくれた。

「まあ、今すぐ行けとは言わないから。それで・・・一体また何だって、彼女にそんなことを訊く気になったんだって」

フルートはほっとしながらグラスを受け取った。素直に、

「彼、と、目が合ったんだ——つまり、彼女をさらった、竜王の息子だけれど」

言葉を探しながら、ゆっくりと話し始める。

「とても奇妙な感じだった。静かだけれど強い視線で・・・ちょうど、初めて目にする敵を見るような・・・それにまるで、ぼくも彼を敵視しなければならないと言われているような——そんな感じがした。それがどういうことなのか、よくわからなかったけれど・・・でも彼が、フィリシアを手放したくなかったのだということだけは、とてもよくわかった。ずいぶん手厚くもてなしていたようだし・・・それで、思ったんだ。彼が、フィリシアに、とても、その、好意を寄せていて・・・もしかしたら、結婚の申し込みくらい、したのではないだろうか、とね」

「で？ フィリシアのほうはどうなのか、確かめたかった？」

「うん」

セレンは、どうしたものだろう、という顔をしてフルートを見ていたが、

「そうだな・・・君が自分自身のことにも鈍感なことに疑いはないし。まあ、そのくらいで上出来と言うべきなんだろうな」

「・・・何だって？」

フルートは怪訝な顔をしたが、セレンはかまわずに、

「謝る言葉をしばらく考えていればいい。ぼくは少し用があるから外すけれど、すぐ戻るから待っていて」

フルートがため息をつきながら椅子の背に沈みこむのを確認し、セレンは部屋を出る。

行先はもちろん決まっている。フルートにまかせておいたら、どんなことになるか知れたものではない。

そういうわけで、セレンがフィリシアの部屋まで来てノックをすると、

「どなた？」

と、迷うような声が返って来た。それへ、軽い口調で、

「ぼくだよ、お姫様。ちょっといいかな」

呼びかけると、中では少しためらうような気配があり、ややあって、
「どうぞ」

と返事があった。セレンはそっと中に入った。

フィリシアは、少し目が赤い。たぶんそのために、セレンと会うのをためらったのだろう。

「聞いたよ。フルートが何かものすごくばかなことを言ったんだって」

セレンは何気ない調子で切り出した。

「ごめんね、人の気持ちなんか全然わからない奴でさ」

「まあ」

フィリシアは、この、友を友とも思わないようなセレンの言い方に、多少こちらが戸惑ったようだった。

「そんなことないわ。私が勝手に取り乱したのよ」

「あんな奴、かばうことはないよ。ほんと、繊細さのかけらもないんだから」

セレンは言ってから、いたずらっぽく笑って、

「帰国したあと、あいつが君の所に求婚しに行くことがあったら、今日のお返しに振ってしまっていていいからね」

「あの人 cameたらね」

フィリシアは冗談だと受け止めて、くすくす笑った。セレンは内心、まったく前途多難な二人だと思ったが、調子を合わせ、いかにも罪の無さそうな笑顔を浮かべて見せながら、

「ぼくが行かせるよ。だから、他の誰かに結婚を申し込まれても、とりあえず、あいつが行くまでは待っていてくれない？」

フィリシアは何と言ったものか迷ったようだった。

「・・・だって、あの人 cameなかつたら、それじゃあ私、おばあさんになってしまうわ」

「ぼくが絶対に行かせるから」

セレンはさりげなく強引に言った。

「それを振ったあとは誰のお嫁さんになってもいいから。あの王子様にはそれくらいさせないと、ぼくの気が済まないよ」

「でも、私はもう気にしていないわ」

フィリシアはいくぶんおろおろし始めていたが、セレンはかまわず、軽い調子で続けて、

「フルートのことなら、どうせ、誤解されて困るような想い人はいないんだから。君が国に帰ったら、君の所にはわんさと求婚者が押し掛けて来るだろうけれど、それを少しばかり待たせておいたって、こんな可愛らしい姫君のためだもの、誰も気を悪くしたりしないって。・・・ああ、そうか、それとも——待たせておけないような人が、君のほうにはもういるのかな？ この美しい姫君の心を射止めた、幸運な想われ人がさ？」

「まあ、いないわ！」

フィリシアは赤くなった。

「意地悪なひとね、セレン・レ・ディア！」

「君の名誉と、ぼくの悪だくみのためだからね」

セレンは悪びれずに言って、さらりと、

「じゃ、約束してくれる？ 帰国したら、とりあえずフルートを待っていてくれるって」

フィリシアは押し切られたように、

「・・・ええ」

困った顔をしながらうなずいた。

「ありがとう」

セレンはにっこりして、

「このことはフルートには内緒だよ。――さてと、それではぼくも失礼しようかな。君も、今日はゆっくりお休み。食事はこちらに運ばせるように手配しておいたからね。あとでフルートが謝りに来たら、どうせ気の利かない冴えない謝り方だろうけれど、今日のところは勘弁してやってよ、ね」

「ええ、それはもちろん・・・」

フィリシアはとてもとても当惑した顔をしていた。セレンが彼女に考える暇を与えなかったのが、彼女には、どうしてこんなことになってしまったのか、さっぱり理解できなかったのだ。

そしてもちろん、セレンは要領よく部屋を出てしまったのだった。

その夜は平和だった。フィリシアは夕食前にはフルートの訪問を受けていたし、ゼラルドの部屋にはこちらから挨拶に行き、あたたかい飲みものをごちそうになった。そしてその他の時間は、彼女は部屋に一人きりでいた。仲間達が冷淡だからそうなったのではなく、むしろ、彼らがフィリシアの疲れを気遣って、そっとしておいてくれたのだった。

フィリシアはぼんやりと、いろいろなことについて思いを巡らせた。本当にこれで良かったのだろうか？ 竜王の息子のあの真剣な青い目のこと、今も首にかかっている魔法のくるみのこと、それから・・・。

彼女は早めに床についた。眠りに落ちるとき彼女が何を考えていたのかは、もちろん、誰にもわからない。

「・・・やはり、光り姫に言って、あの姫をもらい受けたほうが良かったのであろうかな」

その頃、「竜王の沼」の底では、かの偉大なる竜王が、妃と二人で静かに語っていた。「もらい受けて、せめてあの姫の寿命が尽きるまでくらいは、好きにさせてやれば良かったのかもしれない」

あごひげをなでながら考え深げに言った彼は、客人達が帰った後も、息子呼びつけて叱るようなことはしなかった。いずれは諭さなければならぬだろうが、今はまだ、そのときではない。

「いいえ、これで良かったのです」

と、竜王の妃は、穏やかな物腰ながら、はっきりと答えた。尋ねられるまでもなく理由を述べて、

「ご覧になりましたでしょう。あの人間の二人は、とてもお似合いです。たしかに私達は、人間より聡く、力ある種族ですけれど、それで人間と張り合っているも勝てるとは限らないのですわね」

「つまらぬことを」

竜王は仏頂面で言った。妃はまだ十分に青い髪を揺らして笑った。

「でも、あの子は立派でした」

と、彼女は続けた。感慨深げに、

「ナミから聞きました。十日余りも、あの気性の激しい子が、あの姫君に対して、それはそれは気を遣って、何を強いるわけでもなく、ただひたすらに待ち続けたのだと。そういえば姫君が帰るときも、とりわけ激して乱暴することはありませんでしたものね」

「あとでナミを寄越してくれ」

竜王はぶっきらぼうに言った。

「あの親不孝者が、わしに隠れて十日も何をしていたのか、わしもよくよく聞かねばなるまい」

「そうなされませ」

妃は優しく言った。

「あの子は、きっと良い後継ぎになります。もう少しあの子が落ち着いたら、今度はあの子を想ってくれるような、もちろん人間ではない、結婚相手を見つけてやりましょうね」

そしてこのとき、当の竜王の息子はどうしていたかといえば・・・。

偉大なる竜王の後継ぎたる竜王の息子は、自分の部屋に引きこもって、誰一人中に入れようとはしなかった。そして、暗い目をした彼の前に今まざまざと思い浮かんでいたのは、彼の愛しい姫君の姿ではなかった。そうではなく、彼を今ひどく苦しめ、傷つけ、悩ませていたのは・・・今日の昼、彼が船を見送ろうと館から船着き場を見下ろして、あの王子に気付いて思わずその姿をじっと見つめた時の――そして、姫君達を待っている様子だった王子が彼の視線に気づき、首を巡らせて迷いもせず彼の姿を捉えた時の――、あの、恐れげもなく真っすぐにこちらを見返して、まじろぎもせずと凜と冴えていた、意思の強そうな、涼やかに澄み切った青い瞳の色だったのである。

遥かな国の冒険譚
竜王の館（後編）

<http://p.booklog.jp/book/107687>

作: 雪村月路

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ariadnemaze/profile>

ブログ : <http://snow-moon.cocolog-nifty.com/>

絵: 池田 優

ホームページ : <http://web.thn.jp/chocalo/>

ブログ : <https://creatorsbank.com/ikedayu/diary>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107687>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107687>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ

遙かな国の冒険譚

始まりの物語・風の贈りもの

<http://p.booklog.jp/book/97421>

シリーズの読み始めに適した2編を収録。
リーデベルクの王子フルートと、クルシュタインの王女フィリシアの、
旅の由来と、道中の1ページ。

遙かな国の冒険譚

火の鳥

<http://p.booklog.jp/book/96700>

フルート、フィリシア、セレン、ゼラルドの一行は、旅先で、
さわると熱い卵をひとつ、手に入れたのだが…。

遙かな国の冒険譚

逃避行

<http://p.booklog.jp/book/99542>

聖なる国の第一王子は、従者ひとりを持って出奔したのだった。
ゼラルドが祖国をあとにした顛末を描く一編。

遙かな国の冒険譚

光り姫

<http://p.booklog.jp/book/96386>

王女フィリシアが、妖精を統べる〈光り姫〉ミルガレーテと初めて出会った、夏の日のこと。

遙かな国の冒険譚

化身の魔女

<http://p.booklog.jp/book/96559>

旅の途中、ルークとセレンは、道案内の少年と行動を共にする。魔女に出くわさないように案内する、と少年は言うのだが…。

遙かな国の冒険譚

夜を越えて

<http://p.booklog.jp/book/97502>

囚われの巫女を救うことはできるのか。
紅い耳飾りの導く先で、フルートとゼラルドの見たものは。

遙かな国の冒険譚

お姫様と猫

<http://p.booklog.jp/book/102355>

メルヘンの色合いが強い「お姫様と猫」「三つの果実」の他、
日常の1ページを描いた「甘い、すっぱい」を収録。

遙かな国の冒険譚

跳ぶ

<http://p.booklog.jp/book/98350>

リーデベルクの王子フルートと、その友セレン・レ・ディアの
少年時代のエピソード。
13才になったセレンは、国王に拝謁することになり…。

遙かな国の冒険譚

竜王の館（前編）

<http://p.booklog.jp/book/106706>

雨乞い行列に参加したフィリシアは、竜王の沼で…。
ヒロインの揺れ動く心を描いた前後編の前編。

～ 作者より ～

お待たせしました。「竜王の館」、後編をお届けします。

このシリーズでは珍しい長さと雰囲気を持つエピソードで、
読後のご感想を聞くのがこわいお話のうちのひとつなのですが、
好きというお声をいただくこともあり、思いきって切り出しました。
フィリシアのイメージが変わる方も、いらっしゃるかもしれません。

読んでくださったあなたは、いかがでしたか？

(雪村月路)

～ イラストレーターより ～

水の底の世界を舞台に進んでいくお話から感じたのは、

前後編通じてどちらも水の青さを感じるのですが、

それぞれ違った青色ということでした。

前半は寂しげで憂いのある青と雨雲がかかったような景色、

後半はその雨雲が晴れ美しく広がる水面の青です。

そんなことを考えながら、表紙を作らせていただきました。

少しでも水の世界を感じていただけたら幸いです。

(池田 優)

※よろしければ、この本のご感想をお寄せいただけたら、とても嬉しいです。

<http://p.booklog.jp/book/107687>

